

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：25403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780483

研究課題名（和文）三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容

研究課題名（英文）Transformation of Student Evaluation System in Germany in Reconstruction of Secondary Schools from Three to Two-branched System

研究代表者

卜部 匡司（URABE, Masashi）

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：30452600

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまでのドイツに典型的な三分岐型の中等学校制度が二分岐型へと再編されるなか、その教育評価の制度はどのように変容しているのかについて、その変容過程を構造的に解明した。またそれをもとにドイツの教育評価の機能がどう変化しているのかを分析した。ドイツの学校制度は、できるだけ多くの生徒が中等前期修了資格や大学入学資格（アビトゥア）を得られるよう、生徒の進路変更をより柔軟に認める方向で変容し、その結果として分岐型制度の弾力化が生じているが、教育評価（修了資格）制度は三分岐型を維持している。その結果、教育評価に伴う生徒の包摂機能が少し強まり、選抜機能は制度的な多元化が進んでいる。

研究成果の概要（英文）：This research project described how student evaluation system and its functions have changed along with reconstruction of the secondary school system in Germany. Due to reduce the achievement gap between the students, German secondary schools are gradually transforming from three to two-branched system. This reform allows students to change their career tracking more flexible for getting higher qualifications, while student evaluation system still keeps three different qualifications: 1) Berufsreife, 2) Mittlere Reife, and 3) Hochschulreife. As a result, student evaluation system works more inclusively and its selective or allocative function has become more diversified.

研究分野：教育学（比較国際教育学）

キーワード：教育評価 ドイツ 中等教育

1. 研究開始当初の背景

(1) PISA 調査開始以降、学力と評価は世界的な関心となっている。とりわけ「PISA ショック」を経験したドイツでは、カリキュラムと評価についての見直しが行われており、抜本的な改革が進められてきた。こうした中で、ドイツの教育改革の動向に関する研究がよりいっそう求められている。

(2) これまでの研究では、ドイツの教育評価制度の歴史的展開過程とその機能的変容の解明に取り組んできた。特に、先行研究「ハウプトシューレの廃止に伴うドイツ教育評価制度の変容」では、ラインラント・プファルツ州の事例を中心に、ハウプトシューレ廃止後のギムナジウムおよび新制実科学校への再編に伴う教育評価制度の変容について考察した。本研究は、これらの研究の延長線上に位置づくものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでドイツに典型的だった三分岐型の中等学校制度が二分岐型へと再編されるに伴い、ドイツにおいて教育評価制度がどのように変容しているのか、すなわち子どもたちの成績評価やそれに伴う修了資格の制度について、その変容過程を構造的、実証的に解明することである。またその背景にある評価理論ならびに能力理解の傾向を明らかにすることである。そして、これらの考察をもとにドイツにおいて教育評価制度の機能がどのように変化しているのかを分析することである。

3. 研究の方法

(1) 中等学校制度の再編に伴う教育評価の制度的変容とその機能的変容を解明するため、これらに関連する文献、政策文書、報告書を幅広く収集した。それと並行して、教育評価に関する理論モデルを整理するため、教育評価の理論に関する最新の文献を収集し、動向を分析した。

(2) 文献調査では把握することのできない制度の変容実態について知るため、ラインラント・プファルツ州のマインツ市およびバード・クロイツナッハ市、バイエルン州のバンベルク市およびニュルンベルク市、バーデン・ヴュルテンベルク州ワインガートン市を中心に、教育政策担当者、研究者、学校長・教職員などへのインタビュー調査を実施した。

(3) 教育評価の制度的変容に伴う機能的な変容を考察するため、バンベルク大学、ポツ

ダム大学およびワインガートン教育大学において、ルーマンのシステム論に基づく機能的記述の方法に基づく研究討議を行った。

4. 研究成果

(1) ドイツにおいて三分岐型中等学校制度の再編の動きが加速したのは、PISA で好成績を収めた国の多くが単線型学校制度を採用していたこともあるが、その一方で、ドイツでは三分岐型制度を厳格に維持してきた州のほうが PISA でも好成績を収めたこともあり、三分岐型から単線型への急進的な改革論議には至らなかった。こうした状況においてドイツ各州で模索されたのが、単線型の初等教育（基礎学校）をどのように中等教育にまで延長させるかということであった。そして、この課題をめぐる各州なりの解決策として出現したのが、次の五つの施策である。すなわち、基礎学校の延長、共通のオリエンテーション段階、基礎学校の就学期間の弾力化、ギムナジウム + 新制中等学校、総合制学校という施策である。

(2) 他方、制度改革により、もはや従来の三分岐型制度を維持している州は見当たらないが、校種名を変更するかたちで「新種の三分岐型」制度（例：ギムナジウム / 新制中等学校 / 総合制学校）を採用する州も出現している。三分岐型制度は、子どもたちの多様性に最大限の配慮をするがゆえに採用されるものである。生徒たちが多様であれば、全員が単線型制度で学習するよりも、同レベルの学力を備えた子どもたちを集めて同質な学習集団をつくるほうがよい。そう考えて整備されたのが、「新種の三分岐型」制度である。

(3) 学校制度は三分岐型から二分岐型へ再編されつつある中で、従来の3種の修了資格制度は依然として三種のまま維持されている。つまり、校種の再編によって学校制度そのものは三分岐型から二分岐型に変わりつつあるように見えるが、修了資格制度を考慮すると、実際には依然として三分岐型の学校制度が維持されていると解釈できる。

(4) 修了資格制度にほとんど変化が見られない中で、学校制度の再編は、生徒の進路選択を柔軟にする方向で評価制度の多様化をもたらししている。すなわち、従来は三種の中等学校からひとつの進路を選択すれば、あとはそのまま各校種の修了試験（資格）を目指して勉強すればよかったが、二分岐型（あるいは総合制学校を伴う「新種の三分岐型」）の学校制度が拡大する中で、進路選択やその途中の変更がより柔軟に行われるようになったのである。これまで生徒の進路選択は、ほとんどの場合、通信簿の成績をもとに行わ

れてきたが、近年の改革によって、ドイツでは、次の六つの施策が見られるようになった。すなわち、拘束力のある勧告、保護者の決断、学校の推薦、試用措置、席次配分、後半の進路変更の制度である。

(5) これら六つの教育評価制度を概観すれば、それぞれの問題点は次の四種に分類できる。第一に、保護者の決断がうまくいかないときに生じる問題点である。これらの問題点は、相互に絡み合っている。保護者に決断力がなければ、学校が干渉せざるを得ない。仮に、保護者に決断力があっても収容定員がオーバーすれば、保護者の決断が尊重されないこともある。第二に、成績評価の正当性が疑われたときに生じる問題点である。これらも相互にもつれ合っている。つまり、評点はその子の本当の成績を反映していないとなれば、診断のほうがよい。しかし、診断には主観が入り込む余地があり、それを克服しようとすれば、客観的な統一テストのほうがよい。しかし、評点やテストが子どもに与えるプレッシャーや弊害(学びの矮小化)を考慮すれば、やはり診断のほうがよい。結局、学校の成績評価が疑わしいとなると、実際に進学先の学校でうまく勉強できるか試してみようという話になる。それでも、数日間の体験だけでそれは判断できないとすれば、結局はテストで決めるしかない。しかし、テストで決めるとなると、それまでの学習との関連性をめぐり出身校の間で格差が生じる。第三に、収容定員超過への対応に伴って生じる問題点である。収容定員が超過すれば、保護者の決断は尊重されなくなる。その一方で、子どもの成績順に受け入れれば、先の第二の問題点に突き当たる。また居住地の順(近接性)で受け入れれば社会的不平等の強化につながる。そうならないように抽選にすれば、学校の風土やアイデンティティに揺らぎが生じる。第四に、後半での進路変更において生じる問題点である。実際、中等教育段階の後半で進路変更を認めても、上方転籍においては低次の学校から高次の学校への接続がスムーズにいかない。また下方転籍を禁止すれば、受け入れる前の試用期間で門前払いする上位校が増えるリスクもある。そうかといって下方転籍を認めれば、下位の学校は差別的なレッテルを貼られてしまう危険性がある。

(6) これらのジレンマは、ある問題点を克服するための対策を講じようとするれば、別の問題点が生じ、それを克服しようとするればさらに別の問題点が生じてくることにある。その結果、制度そのものは少しずつ複雑化、多様化していく一方で、議論そのものは依然として堂々巡りになって、問題点そのものは克服できないままとなる。

(7) 最後に、ドイツ全体の改革動向として言えるのは「分岐型制度は弾力化するけれど

も、弾力化しても分岐型そのものは維持する」ことである。次に、教育評価制度の変容については、学校制度再編により学校制度は一見すると変わりつつあるように見えるが、修了資格制度は依然として三分岐型を維持していると言える。その一方で進んでいるのが、選抜制度の多様化である。実際、生徒の進学先の選択ではまず保護者の決断を尊重するが、それでうまくいかない場合は、学校の成績または試験によって決める。それでもうまくいかないのであれば、進学先の判断や学区制度あるいは抽選などの方法で決定し、あとは後半の進路変更を柔軟に認めて微調整を行うのである。

<引用文献>

ト部匡司「三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容」『広島市立大学国際学部『広島国際研究(第22巻)』2016年、131-141頁。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

ト部匡司、三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容、広島国際研究、査読有、第22巻、2016、pp.131 - 141。

ト部匡司、学力観をめぐると日独比較研究()、徳山大学総合研究所紀要、査読無、第35号、2013、pp.65 - 71。

[学会発表](計11件)

Urabe, Masashi/Ninomiya, Akira, "Second Chance Learning in Germany: What is the Role of Higher Education?" The 40th Annual Pacific Circle Consortium Conference 2016 in Saipan, July 6th, 2016, Saipan Southern High School, CNMI.

ト部匡司「ドイツの大学における学び直し型プログラムの検討」日本比較教育学会(第52回大会)、2016年6月25日、大阪大学。

ト部匡司「ドイツの中等教育制度改革における問題点」中国四国教育学会(第67回大会)、2015年11月14日、岡山大学。

Zeinz, Horst/Urabe, Masashi, "Orientation Regarding Exposure to Failure and Conceptions of Failure - Two Studies of Cross-Cultural Comparison between Germany and Japan." WERA (World Educational Research Association) Conference 2015 Budapest, September 10th, 2015, University of Budapest, Hungary.

Zeinz, Horst/Urabe, Masashi, "Conceptions of Failure - An Inter-cultural Comparison between Germany and Japan." ECER (European

Conference on Educational Research)
2015 Budapest, September 9th, 2015,
University of Budapest, Hungary.
卜部匡司「ドイツにおける中等教育制度改革をめぐる論点」日本比較教育学会(第51回大会) 2015年6月13日、宇都宮大学。
卜部匡司「PISAの受容に見る国際標準化とダイバーシティの対話の可能性 - わが国とドイツの事例を中心に」中国四国教育学会(第66回大会) 2014年11月16日、広島大学。

Urabe, Masashi/Ninomiya, Akira,
"Dialogues between National
Standardization and Global Diversity on
Educational Policy with Acceptance of
PISA - Cases of Germany and Japan." The
38th Annual Pacific Circle Consortium
Conference 2014 in Sydney, October 19th,
2014, Australian Catholic University,
Australia.

Urabe, Masashi, "Japanese School
Culture and Implicit Proficiency
Theories of Japanese and German Teachers
- A Comparative Analysis." ECER
(European Conference on Educational
Research) 2014 Porto, September 5th,
2014, University of Porto, Portugal.
Zeinz, Horst/Urabe,

Masashi/Scheunpflug, Annette/Dresel,
Markus, "Teachers implicit theories: An
intercultural comparison between
Germany and Japan." ECER (European
Conference on Educational Research)
2014 Porto, September 5th, 2014,
University of Porto, Portugal.

卜部匡司「ドイツにおける三分岐型から二分岐型学校制度への改革動向」日本比較教育学会(第50回大会) 2014年7月12日、名古屋大学。

[図書](計2件)

Urabe, Masashi, "Inklusion als
Normalfall - japanische Anregungen".
In: Lang-Wojtasik, Gregor/Kansteiner,
Katja/Stratmann, Jörg,
Gemeinschaftsschule als pädagogische
und gesellschaftliche Herausforderung.
Waxmann: Münster 2016, pp.45-55.

Urabe, Masashi/Ono,
Ayumi/Almonte-Acosta, Sherlyne, The
Consequences of Changing Education
Policies on Social Inequality: The Case
of Japan. In: Windzio, Michael (eds.),
Integration & Inequality in Educational
Institutions. Heidelberg: Springer 2013,
pp.153-163.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.urabe.intl.hiroshima-cu.ac.jp/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

卜部 匡司 (URABE, MASASHI)
広島市立大学・国際学部・准教授
研究者番号: 30452600

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし